

Qくんの「じわら」でうっぱい

尾形 節子

四歳児年中組一学期

三月にお誕生日を迎えたばかりのQくんは、「もう四歳だ。大きくなったんだよ」という気持ちでいつぱいだったのかもしれない。でも、はじめの幼稚園生活は「こわい」でいつぱいだった。

Qくんは、はじめの幼稚園生活にちよつと緊張しながらも、線路をつなげて汽車を走らせたり、おままごとのおうちでごちそうを作ったり、わりと楽しそうに遊んでいるように見えた。そし

て、先生が「もうお迎えの時間ですよ」と声をかけると、「？」といった表情でやはりにこにここと笑って遊んでいた。たぶん、「幼稚園というところは帰る時間が決まっているので、その前に片づけをして、帰り支度をするようになっていく」という生活のパターンが、Qくんには実感としてわからなかったのだと思う。だから、最初にQくんが気づいたのは、「どうやら片づけはするものらしい」「片づけをするとはめてもらえららしい」「片づけをしない人には注意をしてもらいたい」ということだった。それは、せいんぶ先生がしていることだった。もつとも、それが先生の一番伝えたいと思っていたことというわけではなかったのだけれども。

最初先生は、Qくんをなんとか帰る気にさせることで精一杯だった。けれども何日かすると、「Qくんかたづけしています」「Qくんいすをなら

べました」「Qくんもうすわっています」と言いながら真つ先に帰り支度をするQくんの変化に、「なんかちがうな」と思うようになった。「自分はやらなければならぬことをきちんとやっています」ということを認めてもらいたいQくんの気持ちがびんびん伝わってきて、先生はちよつと困った。だって、先生の伝えたいことは「きれいになって気持ちいいね」だったから。まあ理想をいえば、だけれど。

ところでQくんは手が早い。ちよつと「違う」と思うと、あつという間に手がでる。たとえば、誰かが使っているものを貸してほしい時、Qくんは「かして」と聞いてみるのだが、相手が「いや」と言うと、間髪入れずにポカッ。『かして』と言ったら、貸してあげないといけないのに貸さないから」というのが、Qくんの言い分。「使っているから貸せないということもある。相談して

みないことには何ともいえないなあ」というのが先生の考え。二人の思いはズレている。そこでまず先生は、Qくんがかつとなる前に、Qくんのしたいことやほしいものを「ほらこちちでもできるわよ」「同じのここにもあるのよ」と提案していくことにした。とっさに思いつかない時には、とりあえず間に入って「どうかした？」と声をかけるようにした。それでも間に合わず、Qくんにぶ

たれたりひつかかれたりして泣く子は多かったけれど、その仲裁にかなりの時間を割いた。Qくんが、入園したばかりの幼稚園で、「乱暴な子」「いやな子」というレッテルを貼られないように、Qくんのしたいことやほしかったものを周りの子どもたちにも伝え、Qくん自身をわかってもらえよう最大限努力しているつもりだった。だから、ある朝Qくんのお母さんに「Qくんが幼稚園を『こわい』と言っている」と言われた時には心底

驚いてしまった。「どちらかといえば、まわりの子どもの方がこわい目にはあっているのに」という感じだったから。

けれど、とりあえず「こわい」つもりになって見ることにした。しばらくすると、「こわい」はQくんについて考える時のキーワードになった。「こわい」からおうちのトイレ以外では用をたせないQくん。

「こわい」から、幼稚園で着替えができない（たとえば、汚れた靴下を脱げない）Qくん。

「こわい」から、まわりの子どもとぶつかってしまふQくん。

とにかく「こわい」から、自分を守ることで精一杯なQくんなのだろ
う。



四歳児年中組二期

夏休みあけの九月、Qくんは元気に登園していた。Qくんのお母さんは、「今年の夏はようやく外でもトイレに行かれるようになり、やっと遠出ができました。(今までは、家のトイレに帰れる範囲の時間しか外出ができなかった。幼稚園では、一度失敗してしまった以外は家につくまで我慢して、トイレに行かなかった。もともと排泄の間隔が長い方だったらしい)」と嬉しそうに報告してくれた。幼稚園でも先生と一緒にトイレに行かれるようになり、着替えも一人でできるようになっていた。ゆつくりとはあるが、ひとつひとつの生活習慣を自分のものにしていくQくんの様子を実感され、お母さんも先生も嬉しく思っていた。

しかし、九月も終わりに近づいた頃、Qくんの

お母さんから「『幼稚園では、お弁当を全部食べなくてはいけなのがいやだ』と言って、お弁当のある日は幼稚園に行くのを朝しぶるんです」と言われ、またまた先生はびっくりした。だって先生は、Qくんに一度もそんなことを言ったことはなかったし、「『食べたい』と思って食事をすることが一番大事」だと思っていたから。でも、確かに先生は、全部食べた子のお弁当箱を見て「きれいに食べたわねえ!」とほめたり、「おなかがいっぱいになっちゃったから残したい」という子に「そっか、じゃあしかたないよね」と言ったりしていたから、「お弁当は残さず食べるもの」というのが一番に伝わってしまうのも仕方なかったのかもしれない。とにかく、「『食べたい』と思って食事をするところから始めたい」と考えていることを伝えた。そして、「『まずは本人の食べたい分だけ食べればいい』ということをわかりやすくQ

くに伝えていこう」ということだった。

Qくんは、お弁当を食べなくなった。正確に言うと、幼稚園では食べなくなった。つまり、家に帰るとすぐにお弁当を食べるようになった。なんだか、トイレと同じような感じである。

四歳児年中組三学期

相変わらず、Qくんはお弁当を食べなかった。

しかし、最初の頃とはまどった子どもたちやお母さんや先生も、この頃になると「まあ、そういうこともある」と思うようになっていた。

お弁当を食べないQくんと一緒にお弁当を食べるという一風変わった食事風景もごく自然な様子になっていった。「Qくんきょうもおべんとうたべないのか」「Qくんはおながすくのじかんがかかるんだよ」「Qくんは、おうちでたべるのがすきなんだよ」という会話が、Qくんもまじえて

かわされる。最初の頃の「このこと聞いていいのかな?」「聞かれたらどうしよう……:」というな

んとも言い難い緊張感はずでなくなっていた。

「箸が上手に使えないからお弁当が食べられないのではないのでしょうか」「食べるのが遅いのがいやなのではないでしょうか」とQくんがお弁当を食べられない理由を必死に探していたお母さんも、「家では、『おいしい』『おかあさんといっしょにたべたい』とか言って食べるんですよ。もう何というか……:」と笑って話せるようになっていた。

先生は、お弁当の時間のQくんの楽しそうな話しぶりを見て、「子ども同士で仲良く会話が進むこと(いざこざにならないこと)がQくんにとつてはとても嬉しいことなんだ」と思うようになっていた。幼稚園で収穫したミカンやお誕生会のおやつなどはあつという間に平らげてしまうQくん

の様子も、先生を安心させた。「幼稚園で緊張のあまり食べ物のどを通らない、ということではないらしい」と思えたので。

五歳児年長組 一学期

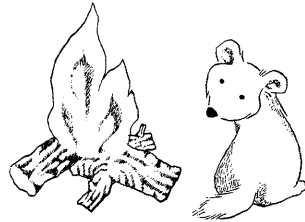
相変わらず、Qくんはお弁当を食べなかった。先生は、ちよつと考えていた。「もしかしたら、食べ始めるきっかけを逸しているのかもしれない」。

六月の一番最初のお弁当の日の午前中、Qくんは砂場で大きな海をつくり、大きな山をつくり、トンネルもうまく開通し、水を流し込む水路も完成し大満足だった。先生は、「チャンスかもしれないな」と思った。そこで、Qくんにこう言った。「今日は、食べてみようか？ お弁当」

Qくんは、「いいです」と断った。そこで、先生は、「あのね。人間の体もね、ずっと使わない

と動かなくなっちゃうんだって。毎日動かし続けていることが大切なんだって。無理しないでちよつとずつがいい（このとき先生は、捻挫した足のリハビリ中。もちろんQくんも

知っていた）んだって。幼稚園でお弁当食べるのも同じだと思うんだ。久しぶりに食べてみよう」と言ってみた。するとQくんは、「誰もいないところがいい」と言った。そこで、二人は幼稚園の中をいろいろ捜しまわった。Qくんは、「誰もいないところ」として、職員室の片隅のスペース（職員の着替えのためにカーテンで区切られているが、カーテンの外では教頭先生や事務の方がお弁当を食べているという状況）を選んだ。そし



て、Qくんは久しぶりにお弁当を少しだけ食べて帰った。

「誰もいないところでのお弁当タイム」三回目、お弁当を全部平らげたQくんは「フー！（やったぜ！）」と息を吐きながら誇らしげにカーテンを開けて出てきた。背中ごしにそれを聞いた先生は、お弁当を食べていたフリーの先生と思わず目を合わせてほほえんだ。そして、なんかちよっと嬉しくなった。

六月四回目のお弁当の日、先生は保育室にたてで囲った食事スペースをつくった。そしてQくんは、久しぶりに保育室でお弁当を食べた。五回目の日は、いつも遊んでいるPくんも一緒についたての中で食事をした。「ここいなあ、ほくもここでたべたいなあ」「いいよ」というやりとりを、Qくんはとても喜んだ。その後Qくんは、いろんな子どもと「ついたての中の食事タイ

ム」をすごした。先生は、Qくんにとって「自分の居場所が目に見える形で確保されていること」はとても大きなことなのだと思う。自分の居場所がちゃんとあつて、「だれかここにこないかなあ」と思っている自分がいて、「きてくれてよかった」と思える経験を重ねられたことが、Qくんの気持ちをゆつくりと満たしていくように思われた。

一学期最後のお弁当の日、Qくんはみんなと同じテーブルでお弁当を食べた。二学期どうなるかはわからない。でも、その日のQくんは、「こわい」と思う気持ちとまっすぐにつきあっているように見えた。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）